

子供たちに学ぶ楽しさを —まほろんでの取り組みと今後の展望—

専門学芸員 田中 敏

1 はじめに

「まほろん」という愛称で親しまれている福島県文化財センター白河館は、「遺跡とそこから出土した資料をとおして、地域の歴史・文化と自然の関わりに理解を深め、地域に対する誇りや、文化財に対する愛着を育むことに寄与すること」を基本理念として、平成13年に開館した。以来、埋蔵文化財の収蔵、展示や各種講座などの教育普及、文化財に関する情報発信、文化財に関連した体験学習、考古学や文化財保護に関する研修など、様々な活動を行ってきた。

「総合的な学習の時間」や「出前授業」、「博学連携」などというキーワードで、学校教育と博物館の関係が議論の俎上に載せられて久しいが、上記のような活動を実践しているまほろんも、当然のことながら、学校教育とは深い関わりをもっている。当館は、年間3万数千人の方々に利用していただいているが、このうち3割強が小・中学生の子供たちである。子供たちは、学校団体の一員、あるいは個人として当館を訪れ、「フォーマルな場」である学校とは異なる時間を過ごしていく。この時間が楽しいものとなるか否かは、子供たち本人の目的意識にも関わるが、まほろんという「組織」以上に、その組織を動かしている学芸員という「人」が大きく関わってくると考える。

ここでは、まほろんが学校教育との関係のなかで取り組んできた諸活動の内容を整理した上で、今後、両者の関係を新たな段階へと発展させていくために、子供たちに直接対する我々学芸員が、どのような意識・姿勢をもって臨んでいけばよいのかについて、私見を述べてみたい。

2 まほろんでの取り組み

1) 来館する学校団体への対応

当館を利用した学校団体数(小・中学校、高校、養護学校)は、平成18年度統計で118校である。その内訳は、小学校が93校、中学校が14校、高校が7校、養護学校が4校で、小学校が全体の79%を占めている(表1)。小学校団体の地域別内訳をみると、当館が所在する白河市内の小学校および近隣の東白川郡・西白河郡内の小学校が27校(29%)、その他の県内小学校が56校(60%)、県外の小学校が10校(11%)となっている。

学校団体が当館を利用する形態については、詳細には把握できていないが、社会科見学での利用、総合的な学習の時間での利用、学習旅行での利用など、様々なケースがみられる。当館では、展示見学に加え、収蔵庫見学、勾玉作りや火おこし体験などの体験学習を団体利用のメニューとして準備しているが、多くの小学校団体(87%)は、展示見学だけではなく、何らかの体験メニューを見学内容に加えている。

当館では学校団体に対応するために、その構成人数に応じて、何名かの職員(学芸員・アテンド)を団体の案内・解説役として配置している。その担当者は、事前に計画された活動

スケジュールに沿って、展示解説や子供たちが行う体験活動を支援する。我々は、学校団体の一員として訪れる子供たちに、諸活動の場でどのように対応すべきなのか、次にみてみたい。

種 別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
小学校	学校数	16	20	23	9	3	11	7	1	0	0	2	1	93
	入館者数	958	994	1,134	635	74	677	446	43	0	0	43	13	5,017
中学校	学校数	1	1	3	1	2	1	3	1	1	0	0	0	14
	入館者数	125	148	120	119	38	19	195	13	40	0	0	0	817
高等学校	学校数	1	0	2	2	0	1	0	1	0	0	0	0	7
	入館者数	47	0	61	36	0	29	0	21	0	0	0	0	194
養護学校	学校数	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	4
	入館者数	0	23	0	0	0	0	4	40	0	3	0	0	70

表1 学校団体の利用状況（平成18年度）

（1）展示解説

当館の展示は、「遺跡から学ぶ自然と人間のかかわり」をテーマとした常設展示と、遺跡から検出された遺構をもとに復元した縄文時代や奈良時代の住居などをご覧いただく野外展示で構成されている。また、特別展示室では年数回企画展を開催している。常設展示は、遺跡からの出土資料と復元資料から、「食」と「住」に関わる歴史を考える「暮らしのうつりかわり」と、その暮らしを支えてきた道具の変遷を考える「暮らしをささえた道具たち」というテーマなどで構成されている。他館の常設展示の例をみると、多くは時間軸で展開する通史展示を基本としているが、当館の場合は、一定のテーマを主軸に据えた、言わばテーマ展示型通史展示となっている。

当館を利用する小学校団体の半数以上は、社会科で歴史を学習し始める6年生の団体である。子供たちはそれぞれ、現在学習している、あるいは過去に学習した歴史に関する様々な知識を背景に当館を訪れ、展示空間に導かれる。展示室内で彼らは、我々の解説を聴きながら、自分たちなりの自由な視点で展示を見ることになるが、この際、我々は一方向的な解説に終始するのではなく、子供たちの反応をみながら、双方向的な解説を心がけることが重要となる。展示の意図を伝えたいがゆえに、どうしても一方向的かつ固定的な解説になりがちであるが、子供たちの感性は、そのような枠に収まるはずはなく、収めるべきでもない。双方向的かつ柔軟な解説を行うことによって、「子供たち自らが発見し、考え、感じる」ための時空間を形づくってあげるといふ姿勢を常にとりたいものである。当館の展示は、地域の資料を素材にして「地域史」を表出したものである。したがって、子供たちが学校で教科書や資料集などの教材を使い学んできた最大公約数的な歴史事象と、展示の内容とは必ずしもパラレルではない。このことが、子供たちを困惑させないように配慮しながら、解説することも大切である。

展示解説をする上で、もうひとつ重要視したいのが、「子供たちに自分たちの地域を見直してもらおう」という視点である。上述したように、当館の展示は地域の歴史を主軸においたものである。また、資料を展示している以外に、ホールには市町村や学校などを手がかりに、遺跡の所在や時代を検索できる装置が備えられており、展示解説の導入などとして活用されている。

現在、常設展には、県内60市町村のうち、22市町村に所在する遺跡から出土した資料が展

示されている。子供たちに、自分たちが住んでいる市町村に先人が残した遺跡が存在し、そこから出土した土器や石器などが展示されているということを説明してあげることで、「教科書で学んできた歴史だけが歴史ではない。自分たちの地域にも、過去から現在まで連綿とした歴史が存在するんだ。」という認識が生まれてくるのではないだろうか。さらにそこから発展して、子供たちが地域への愛着を深めていくきっかけづくりができればと思う。

(2) 収蔵庫の見学

当館には、1,450 台の収納棚が設置された、面積約 2,800 m²の収蔵庫（一般収蔵庫）があり、昭和 4、50 年代に行われた東北自動車道や東北新幹線関連の発掘調査で出土した資料をはじめ、原町火力発電所建設や磐越・常磐自動車道建設関連の調査で出土した資料など、現在平箱で約 4 万 4,000 箱分が収蔵されている。

学校団体の活動内容として、この収蔵庫を見学するというメニューを用意している。展示見学だけではなく、普段入ることのできないバックヤードを見学するという内容は、学校団体対応の目玉メニューとなっている。

収蔵庫内に実際に入ると、子供たちの多くは、収蔵庫の広さと資料の膨大さに驚きの声をあげる。ここでは、膨大な資料が収納されている状況を見るだけではなく、棚に特別に並べられた縄文土器や弥生土器などに触れることもできる。ケース内に展示され、ガラス越しに見ることが多い土器に実際に触れ、観察する機会を設けることによって、土器の重さや質感が体感できるだけではなく、子供たちにとってこれまでは遠い存在であった（埋蔵）文化財が、身近なものへと変化していくことが期待できる。縄文土器の多くが、現在の鍋に相当するものであることを説明する、つまり昔の道具と現在の道具を比較しながら考えることによって、子供たちのこの感情はさらに強くなると考えられる。



写真 1 収蔵庫の見学

「(埋蔵)文化財とは何か」にはじまり、このような膨大な資料を収蔵する意義や収蔵庫の役目などについて、子供たちに問いかけ、いっしょに考える。このような姿勢で子供たちに向き合いながら、自分たちの祖先が生活のなかで創りあげてきた文化（生活）遺産が、現代に生きる自分たちの存在に大きく関わっているということ、そして、将来の世代のためにも、これらの貴重な情報や資料を継承していかなければならないということを順序立てて説明し、子供たちに考えさせる。このことが収蔵庫見学の大きな意義ではないだろうか。

(3) 体験学習

これまでとりあげてきた「展示見学」や「収蔵庫見学」は、「見る」という性格上、子供た

ちにとって、どうしても受け身にならざるを得ない側面をもっている。見学学習では、我々からの問いかけや質問に答える機会はあるとしても、子供たち自らが積極的に参加する場面はそう多くはない。しかし、「体験」の場面では、子供たちの表情は一変する。

当館では、学校団体利用に対応するため、「勾玉作り」「火おこし」「土器作り」「アンギン編み」などの体験学習メニューを用意している。「体験学習」は子供たちにとって、どのような意味をもつのか。「火おこし」の体験を例に、この問題を考えてみたい。

「火おこし」の体験は、学校団体のスケジュールの都合や体験を行う学年にもよるが、通常40分程度の時間を使い、以下のような流れで行っている。

①担当となった職員が、人類が火を知った経緯や火おこし道具の歴史などについて、数分間説明する。団体の人数に応じて、数名の職員がサポート役を務める。②当館では、体験用の火おこし道具として、「マイギリ」と「モミギリ」の2種類を用意している。最初に職員が、マイギリの使い方を説明しながら実演を行う。③子供たちが2人一組になり、マイギリで火おこ



写真2 火おこし体験

しの体験を行う。④マイギリで火おこしに成功した組は、腕力とコツを要するモミギリに挑戦する。⑤原則として、全員がマイギリで火をおこすことができた時点で、体験を終了する。

学校団体へ依頼するアンケートをみると、火おこし体験は概ね好評である。「火をおこすことができて、楽しかった。」「なかなかできなかったのですが、ついた時はとても楽しかったです。」などという感想がみられる。

しかし、なかには、「つまらなかった。」という感想もある。「つまらなかった。」という理由の多くは、「時間内に火をおこすことができなかった。」というものである。我々は、多くの子供たちに、火おこしに成功したという達成感を味わってほしいと願っているし、そのために、できる限りの補助を行っている。それでも、道具の不具合や天候などにより、どうしても火がおきない場合がある。

「つまらなかった。」という感想がある一方で、「うまくできなかったけれど、楽しくできました。」という感想もみられる。このことは、子供たちが楽しいと感じたのは、火をおこすことができたという理由からだけではなく、2人で協力して、声をかけあいながら火おこしを体験する時間やその過程も楽しいのだ、ということをも物語っているのではないだろうか。また、当然のことながら、楽しい時間になるかどうかは、我々職員の子供たちへの接し方（説明の仕方やその内容、補助の仕方）にも関わってくるということを忘れてはならない。

火おこし体験は、単なる「体験」ではなく、「体験学習」である。アンケートのなかに、火おこしの体験は「たいへんだったけど、昔の人のたいへんさがよくわかった。」という感想もある。子供たちは、昔と類似した方法で火おこしを擬似体験し、それを現在のものと比較する

ことによって、当時の人々の苦勞や生活の工夫などについて立体的に捉えることができる。そして、子供たちの意識を、「現代に生きる自分たちがどうあるべきか。」という問題を思考するまでに発展させていく。これが体験学習の大きな意義だと考える。我々に求められているのは、このような質の高い体験学習を志向していくことなのではないだろうか。

2) 「おでかけまほろん」の現場で

当館では、「おでかけまほろん」と呼んでいる「館外体験学習支援事業」を、開館した平成13年度から実施している。この事業は、当館職員が学校や公民館等の教育機関に出向き、体験学習の支援を行うというもので、平成19年度は20ヶ所で実施した(表2)。利用形態では、小学校6年生の社会科授業の一環として利用する例が多かったが、小規模校などでは複数の学年にわたって、「総合的な学習の時間」のなかで利用する学校もみられた。

(1) 実施までのプロセス

おでかけまほろんを実施までの流れは以下のとおりである。

①募集要項を県内各市町村の教育委員会に依頼して、小中学校・公民館等に送付するとともに、その内容を当館ホームページに掲載し、募集の案内をする。実施を希望する学校は、おでかけまほろんを実施する学習科目(社会科、総合学習など)を明記した学習計画案を作成した上で応募する。

②実施する学校等は、実施日程を調整後、前年度中に決定する。

③次年度の各種事業等の担当者を勘案しながら、おでかけまほろんの担当職員(原則1回につき2名)を決める。

④新年度に入り、担当する職員が学校等に赴いて、訪問先の担当者と事前の打ち合わせを行う。ここでは、対象学年や人数を最終的に確認するとともに、当日の授業の進め方や準備物等について打ち合わせを行う。

⑤打ち合わせ時の確認事項の内容に応じて、館側の担当職員が当日の活動に必要な考古資料や体験活動器材などを準備する。

	団体名	学年・科目	人数
1	郡山市立多田野小学校	6学年 社会	30名
2	玉川村立玉川第一小学校	6学年 社会	38名
3	南相馬市立鹿島小学校	6学年 社会	39名
4	猪苗代町立千里小学校	6学年 社会	30名
5	郡山市立行徳小学校	6学年 社会	65名
6	郡山市立御代田小学校	6学年 社会	23名
7	伊達市立泉原小学校	5・6学年 社会 総合学習	12名
8	県立豊学校福島分校	幼少部・小学部	11名
9	矢祭町立下関河内小学校	5・6学年 総合学習	18名
10	伊達市立堰本小学校	5・6学年 総合学習	93名
11	喜多方市立岩月小学校	6学年 社会	31名
12	川俣町立川俣小学校	6学年 社会	47名
13	二本松市立針道小学校	6学年 社会	17名
14	郡山市立永盛小学校	6学年 総合学習	43名
15	田村市立関本小学校	6学年 社会	15名
16	いわき市立草野小学校	6学年 社会	66名
17	郡山市立小山田小学校	6学年 社会	112名
18	いわき市立久之浜第二小学校	6学年 社会	10名
19	浪江町立津島小学校	1～6学年 歴史体験	60名
20	会津若松市北会津公民館	幼稚園～6学年 こどもクラブ	17名

表2 おでかけまほろんの実施状況(平成19年度)

(2) 基本的な考え方

以上のような経過を踏んで実施の段階に至るわけだが、おでかけまほろんの基本的な考え方として、「地域」「実物」「体験」という3つの要素をあげることができる。

① 地域

子供たちが意識する「地域」とは、自分たちが住んでいる町であり、学校周辺の区域である。この地域内でどのような遺跡が確認され、どのような歴史が刻まれてきたのか。学校というフォーマルな場でのカリキュラムのなかで、地域の歴史を詳細にとりあげる場面はなかなかないと思うが、子供たちにとっては、このような身近にある歴史を学び、考えるということが、歴史学習に興味と持つだけでなく、自分たちが住む地域に愛着と親しみをもつ第一歩となることだろう。

地域に所在する遺跡の分布図を作成・準備し、それを教材として地域学習を展開させる。分布図を見て、「自分の家のすぐ近くに縄文時代の遺跡がある。」「自分たちの学校の裏山には古墳があったんだ。」など、子供たちは、その事実に驚きの表情をみせながら、自分たちと遺跡そのものとの距離感を縮めていく。そして、これらの遺跡が、自分たちが住む地域の歴史のなかでどのような意味を持っているのか、ということなどを考えてもらう。これが、「地域」を軸に据えた歴史学習のあるべき姿ではないだろうか。

② 実物

当館には、県内各地の遺跡から出土した膨大な量の土器や石器などの考古資料が収蔵されている。これらのなかには、おでかけまほろんを実施する学校等の近隣に所在する遺跡から出土した資料も多く含まれている。おでかけまほろんでは、これらを積極的に活用するため、可能な限り資料を教室まで持ち込み、子供たちに実際に触れてもらうという活動を行っている。子供たちは、教科書で見ているような縄文土器の実物を目の前にして、その大きさや重さを実感し、その迫力にさまざまな反応を示す。この反応を見ながら、現在は埋蔵文化財という特別なものとして扱われているが、実は縄文土器の多くが、食物を調理する鍋として使われていた生活用具であるということ、そしてさらに発展させて、当時の食糧事情はどうだったのか、ということなどを説明してあげると、子供たちは縄文時代の食生活の様子をより立体的に理解することができる。これがまさしく実物のもつ学習効果であろうと考える。



写真3 実物資料に触れる(おでかけまほろん)

③ 体験

館内活動だけではなく、おでかけまほろんの現場でも、体験活動は重要な要素となっている。「火おこし」「勾玉作り」「弓矢」などの体験を基本メニューとしているが、学校等の要望により、これまで「土器作り」や「凧作り」、さらには「土器でお湯を沸かす」などの体験を行った例がある。また、担当職員の判断で、石の剥片で紙を切ったり、粘土に縄文を施したりというミニ体験を行うことも

ある。

「ものづくり」や「道具を使う」という体験活動は、受け身になりがちないつもの授業とは異なり、自分たちが主体となって能動的に進めることができるため、子供たちには楽しい経験となる。確かに、楽しくできた・うまくできたという達成感も大切である。しかし、最も重要なのは、体験活動の過程で、子供たち自らが考え、感じ、何かを発見するということである。おでかけまほろんを実施した小学校の子供たちから寄せられた手紙に、「火おこしや土器さわりなど、実際に体験することで、昔の人の気持ちがじかに伝わってきた。」というものがある。これなどからもわかるように、体験学習には、体験そのものに力点をお



写真4 石器で紙を切る（おでかけまほろん）

くのではなく、子供たちが体験をとおして、先人の知恵や技・意識の一端に触れたり、そこから派生して、新たな疑問を抱いたりという、発展的な活動が求められるのではないだろうか。そのためには、子供たちに接する我々が、常に質の高い体験を目指すという姿勢で活動の場に臨む必要がある。

（3）今後の課題

当館が開館した平成13年度から事業化されたおでかけまほろんは、今年度までに93ヶ所の施設で実施されてきた。訪問先の施設には公民館も含まれているが、ほとんどは小・中学校である。各学校では、準備段階から実施段階まで、先生方からご協力をいただきながら事業を進めてきたが、これまでの経過のなかで、いくつかの課題もみえてきた。

① 主導と支援

おでかけまほろんには、当館職員が中心となり、プログラムを進める「まほろんコース」と、先生方が主体となってプログラムを進め、考古学等の専門的な事柄について、当館職員が補足を行う「連携コース」があるが、前者のコースを選択する学校がほとんどである。埋蔵文化財の保護と活用に携わっているという専門的立場で、先生方が行う授業を「支援」という本事業の趣旨に最も近い「連携コース」をいかに増やしていくかが今後の課題となろう。そのためには、先生方との事前打ち合わせの段階で、おでかけまほろんは、あくまでも先生方が主導で授業を行うという原則を相互で確認することが重要となる。

② 地域的なバランス

平成19年度におでかけまほろんを実施した施設は20ヶ所で、それを地域別にみると、会津地方が3ヶ所、中通り地方が13ヶ所、浜通り地方が4ヶ所となっている。当然のことながら、当館が行っている諸活動は、県内全域を対象としている。おでかけまほろんの対象も県内全域ではあるが、現状の実施地域は中通り地方が中心となっている。

平成19年度、本事業を実施した施設は20ヶ所となっているが、実施を希望して応募していただいた施設は30ヶ所となっている。つまり、10ヶ所の施設にはお断りしていることになる。この10ヶ所の地域的な内訳をみると、会津地方と中通り地方がそれぞれ5ヶ所となっている。会津地方のなかには、地理的な制約等からなかなか当館には足を運べない、遠隔地（南会津町・昭和村）の小学校が含まれている。現在、先着順で20施設という限定で実施している本事業だが、今後は実施施設の数を増やすことや、募集方式を再検討することなどを視野に入れて、地域的なバランスを図っていかねばならないと考える。

③ 評価のあり方

おでかけまほろんは、事前の打ち合わせから実施まで、原則として2人の職員が担当する。そして終了後は、担当職員が復命という形で、実施状況や問題点を報告する。また、実施校の子供たちにアンケートをお願いする場合もある。このふたつが、おでかけまほろんの実施内容を評価する際の判断材料となる。このうち、アンケートは、年2回開催されている当館の運営協議会の参考資料として各委員に提示されて、意見をいただく場合がある。

今後は、担当者によって内容に粗密がある事後報告のあり方を再吟味するとともに、事後報告やアンケートの内容などを総合して、先生方にも参加していただき、本事業を評価する場を設ける必要があるのではないだろうか。おでかけまほろんに限ったことではないが、このような議論の場を設けることで、子供たち・学校・まほろんの三者にとって、さらに内容豊かなおでかけまほろんを実施することができるものと考ええる。

④ 他の施設との連携

県内では、当館のように埋蔵文化財に特化した社会教育施設として、いわき市考古資料館などがあるほか、現在、福島市に縄文時代の宮畑遺跡、郡山市に大安場古墳の調査成果をそれぞれメインテーマにした学習施設の建設計画が進められている。計画中の施設の運営方針や活動計画の内容については明らかにされていないが、いずれの施設も、「学校教育との連携」を重視しながら、活動計画の策定にあたることだろう。そのなかで、「出前授業」的な活動が実施されることは十分に予想される。これらの施設の活動エリアは各市域が中心になると考えられるが、そうなると、当館が現在おでかけまほろんを実施しているエリアと重複することは避けられない。

今後は、子供たちにさらに楽しく、地域に密着した体験活動を提供するためにも、この活動エリアの問題だけではなく、活動のなかで活用する考古資料を相互貸借することなども含め、活動内容に関して各施設間で協議・連携していくことが必要となろう。

3 新たな展開に向けて

以上、まほろんが館の内外を舞台に、学校教育との関係で取り組んできた活動の内容を紹介しながら、それらを取りまく若干の問題点について述べてきた。ここでは、学校教育との新たな関係を築いていくために、どのような活動が可能か、ひとつの試みについて考えてみたい。

1) まほろん利用モデル校事業の創設 —移動教室の試み—

これは、先生と子供たちに、まほろんを学校の教室と同様に利用してもらうという試みである。まほろんを訪れる学校団体は、社会科見学や学習旅行などの一環として、数時間さまざまな活動を行い、帰校するというのが通例である。この試みは、このような一過性の利用形態だけではなく、ある特定の学校が、年間を通じて継続的に利用するというものである。そして、当館で継続的な活動を行うことで、どのような学習成果をあげることができたのかを検証し、その結果を今後の活動指針に反映させていく。これがこの試みの主旨である。

移動教室の準備から実施までの大まかな流れは以下のように考えられる。

(1) モデル校の選定

当館までの距離や来館手段を考慮すると、モデル校として適当なのは白河市内の学校となる。ただし、白河市教育委員会からの推薦を受けてモデル校を選定するという手続きが必要となろう。この際、モデル校として小学校と中学校どちらが適当か、そして、学年をどうするかも検討しなければならない。

(2) 年間カリキュラムの作成

本事業の実施にあたっては、年間活動の計画であるカリキュラムを作成する必要がある。モデル校とその種別、学年を決定した上で、学校と館相互の担当者、場合によってはそこに市教育委員会の所管職員を交えて、学校と当館の年間スケジュールを勘案しながら、年間カリキュラムを作成する。この作業には、相当の時間と労力を要するため、館の担当者は本事業専属とし、補佐役を置く必要があるだろう。

(3) 移動教室の実施

対象学年を小学6年生とした場合、社会科の歴史学習や総合学習の時間に来館し、年間カリキュラムに沿って館内学習を行う。館内学習では、当館で作成した、小中学校における「まほろん」利用の手引きなども参考にしながら、先生方に歴史の授業などを行ってもらった上で、館の担当者がその内容に関連づけて、展示解説や体験学習などの指導を行う。また、ここでは、学校ではなかなか学ぶ機会がない「地域に密着した歴史学習」に力点をおくことが重要になると考える。さらに、総合学習では教科を横断した内容で、たとえば、当館で行っている実技講座のメニューを援用して実施したり、ボランティア活動について学んだりという、幅のある、柔軟な学習活動も可能である。

子供たちは、継続的に行われる移動教室で、当館を自分たちの学校や教室のように利用し、担当職員と交流しながら、楽しい館内活動の時間を過ごすことができるのではないだろうか。

(4) 学習成果を発表する場の提供

通常、学習成果の発表は、子供たちがグループごとに壁新聞などにまとめたり、口頭でその

内容を発表したりという形式がとられているようだが、これを館内で展示という形で紹介してはどうだろうか。さらに、展示だけではなく、館内で成果発表会を催すなど、子供たちの生の声を聴く機会を設けることもできよう。

移動教室という場で行われてきた継続的な歴史学習は、子供たちに何をもたらしたのか。子供たちがそのなかで感じ、考えたこと、そして、新たに抱いた疑問などについて、学習の成果としてまとめることは、子供たち自身だけに重要な意味をもつのではなく、学校と館にとっても大きな意義がある。

以上、ひとつの新しい試みとして、まほろん利用モデル校事業—移動教室—の実施について考えてみた。言うまでもなく、これを事業化するのは一朝一夕にはできない。必要な予算措置をとることも考えなければならない。また、各方面からの協力や指導を受けながら、担当となったスタッフは、その準備から実施まで膨大な業務量をこなすことになる。しかし、まほろんの将来の展望を見据えつつ、この事業を館全体で行う大きな試みと位置づけ、全館員が議論のテーブルに着き、その実現に向けて時間をかけた十分な検討を行う必要がある。

4 おわりに

最後に、学校団体として当館を訪れた子供たち、そして、おでかけまほろんでお邪魔した学校の子供たちから、当館に寄せられた手紙をいくつか紹介したい。

- ・本宮でも遺跡や土器が発見されていることもおどろいたし、とてもうれしかったです。
- ・また、？（はてな）が生まれてきます。
- ・縄文時代や弥生時代のことだけではなく、もっと奈良時代のことなどたくさん知りたいです。
- ・暮らしの変化について学習することができて、歴史がもっと好きになりました。だから、家族とこんど「まほろんに行こうね。」と話しました。
- ・昔に比べて、ずいぶん楽なくらしをしているなあ。少しは知恵を働かせないとなあ。

まほろんで子供たちが行う活動には教科書がない。「もの」を教材として、子供たち自らが考え、新たな発見をする。子供たちからの手紙には、そのことが如実に表現されている。子供たちにとって、まほろんがさらに楽しく、そしてすばらしい場所（まほろば）となりますように。

<参考文献>

- 佐竹桂一 2003 「考古遺物を活用した学校教育への協力—出前授業を中心に—」『研究紀要』創刊号
山形県埋蔵文化財センター
- 田中 敏 2000 「小学校の博物館活用をめぐる—福島県立博物館での実践例—」『福島県立博物館紀要』
第15号
- 長島雄一 2000 「「出前授業」で新たな博物館ファンを獲得」『学ぶ心を育てる博物館』株式会社ミューゼ
- 中村光司 2001 「埋文センターから教室へのアプローチ—小学校を対象とした出張講座の実践例—」
『考古学研究』第48巻第1号
- 福島県文化財センター白河館 2008 『年報2007』
- 山内 智 2007 「学びの博物館の活性化への取り組み—移動博物館と出前授業—」『博物館研究』42巻10号